

レポ ー ト



## 昭和初期におけるラジオ放送による大学開放講座

武蔵野短期大学准教授 野村 和

### はじめに

大学教育を社会へと開放していた事例として、本稿ではラジオによって女性を対象に放送されていた。日本におけるラジオ放送は東京放送局による 1925 年 3 月の試験放送、仮放送を経て、同年 7 月 12 日の本放送から開始されている。3 月に芝浦の仮放送局で行われた東京放送局の開所式において、東京放送局の初代総裁となった後藤新平が祝辞に立ち、「家庭に取り残された女性」が「之からはラジオの力に」よって「共通に文化の恩沢に浴することが出来る様になった」と述べ<sup>1)</sup>、女性にとっての新しい社会教育メディアとしてラジオが期待されていたことがわかる。

本放送開始直後から婦人向け番組と呼ばれる番組の放送が始まっているが、中でも 1927 年 5 月 3 日に始まった「家庭大学講座」は、中等教育を修了した女性向けに、学術的な内容を提供していた番組であった。本論では、「家庭大学講座」によって放送されていた内容を精査して、この番組が大学教育の開放事業として位置付くことを検討したい。

### 1. 「家庭大学講座」に見られる講義の連続性

「家庭大学講座」は、「女学校卒業程度の婦人」を対象にしたプログラムで、「専ら学問的に社会常識上必要な課目」を放送していた<sup>2)</sup>。ほぼすべてが連続講座であり、10 回以上で組まれているものが多い。連続講座は決まった曜日に放送されることが基本であり、聴取者は週 1 回の放送を聞くことで専門的な学習を家庭内で行うことができた。1927 年から 1933 年までの間に放送された題目のうち、同一題目出放送されたため、連続講座であることが明確であるものをあげると以下のようになっている(表 1 「家庭大学講座」の主な放送題目)。

表 2 「家庭大学講座」の主な放送題目

放送年	放送題目 (講師・回数)
1927	遺伝と優生学 (永井潜・13)、文学概論 (松浦一・10)、実せん理論 (下田次郎・5)、青年女性の自己省察 (倉橋惣三・5)、婦人の経済知識 (太田正孝・11)、教育学 (春山作樹・10)、心理学 (高橋平三郎・14)、芸術教育 (春山作樹・5)
1928	音楽概論 (小松耕輔・13)、政治学 (高橋清吾・15)、法律学 (片山哲・17)、社会学 (赤神良讓・12)、国史座談 (鷺尾順敬・17)、宗教学 (宇野円空・17)、科学教養 (西澤勇志智・15)
1929	生理学 (加藤元一他・24)、電気工学 (山本忠興・16)、国史講話 (中村孝也・19)、倒叙英文学 (本間久雄・17)、家庭気象学 (藤原咲平他・11)、進化論 (石川千代松・11)
1930	美術鑑賞①洋画 (石井柏亭・5)、美術鑑賞②彫塑 (朝倉文夫・6)、美術鑑賞③日本画 (紀淑雄・8)、美術鑑賞④工業美 (田邊孝次・10)、音楽愛好者のための音響学① (小幡重一・10)、音楽愛好者のための音響

	学② (田邊尚雄・10)、フランス文学 (吉江喬松・17)、栄養学 (佐伯矩・11)、アイルランド文学 (日高只一・6)、アメリカ文学 (日高只一・12)、万葉集講和 (佐佐木信綱・14)、植物と人生 (川村清一・13)
1931	女性のための哲学 (松原寛・16)、日本演劇史 (河竹繁俊・28)、ドイツ文学 (山岸光宣・14)、基督教講座 (都留仙次・12)、論理学① (中桐確太郎・15)、論理学② (中桐確太郎・12)、声 (鷲尾猛・13)、常識の映画 (森岩雄他・11)
1932	東洋民族の文化 (宇野円空・10)、心得置くべき医学の知識 (平松鶴吉・18)、仏教の常識 (山上曹源・10)、現代と基督教 (塚本虎二・7)、世相の変化と日本婦人の立場 (水野常吉・6)、明治の文学 (本間久雄・14)、子供の心 (青木誠四郎・8)、青年の心理 (青木誠四郎・5)、倫理学 (大島正徳・12)
1933	経済学 (河津暹・3)、国文学を通じて見たる日本の女性 (佐佐木信綱他・9)、哲学 (大島正徳・12)、ラスキンの女性観 (御木本隆三・4)、維新の大業と婦人の力 (藤井甚太郎・10)、支那事情 (柴山兼四郎・2)、ロシアの近状 (藤塚止戈夫・2)、親族関係は如何にして改正せらんとしているか (片山哲・3)、南画入門 (小室翠雲・2)、ジャワの国情 (三好俊吉郎・2)、家庭教育の振興 (竹内道説他・8)、西行法師の山家集に就て (吉田絃二郎・2)

(出典：『東京朝日新聞』「ラジオ欄」及び「NHK 番組確定表」より作成  
注：題目が統一された連続講座のみ抽出)

ちなみに、同一題目でない放送が行われたのは 1933 年のみであり、1933 年に行われた他の放送題目の一覧は以下のとおりとなっている (表 2「連続講座以外の放送題目」)。すなわち同一題目で放送がなされていなくても、同じ曜日に数週間続けて、一人の講師で放送がなされていることが多く、実質的には連続講座として構成されていたと思われる放送が多く行われている。たとえば 5 月 30 日から 5 週間にわたり、芦田均によって行われた中東情勢に関する講義や、田邊忠男によって 4 月 21 日から 11 週間にわたって行われた経済学に関する講義などがこれにあたるだろう。また、複数講師で担当がされていても、10 月 5 日から毎週木曜日には各国情勢に関する放送がなされている例や、11 月 15 日から毎週水曜日に文学論と見られる放送がつつけて行われている例なども、連続講座ととらえることができる。このように、「家庭大学講座」ではほぼすべてが連続講座で構成されていたことがわかる。

表 2 連続講座以外の放送題目 (1933 年「家庭大学講座」)

	放送日		放送題目	講師
1	5 月 2 日	火	満州国の現況 (1)	柴山兼四郎
2	5 月 30 日	火	シリアの今昔	芦田均
	6 月 6 日	火	パレスタイン	芦田均
	6 月 13 日	火	心強いエジプトの近況	芦田均
	6 月 20 日	火	トルコ漫談	芦田均
	6 月 27 日	火	バルカン半島の話	芦田均
3	7 月 4 日	火	北欧の事情 (1)	柳澤健
	7 月 11 日	火	北欧の事情 (2) 諾威と丁抹	柳澤健
	7 月 18 日	火	なぞにつつまれたるメキシコ	柳澤健
	7 月 25 日	火	パナマ運河を中心として	柳澤健
4	4 月 21 日	金	経済学とは何ぞや	田邊忠男
	4 月 28 日	金	現代の経済生活の概観 (1)	田邊忠男
	5 月 5 日	金	現代の経済生活の概観 (2)	田邊忠男
	5 月 12 日	金	経済単位、株式会社を中心として	田邊忠男

	5 月 19 日	金	価格の形成 (物の値段) (需要供給の関係)	田邊忠男
	5 月 26 日	金	価格の形成 (2)	田邊忠男
	6 月 2 日	金	貨幣及び貨幣制度	田邊忠男
	6 月 9 日	金	生産及び生産的企業	田邊忠男
	6 月 16 日	金	商業及び商業的企業	田邊忠男
	6 月 23 日	金	金融及び金融的企業	田邊忠男
	6 月 30 日	金	所得	田邊忠男
5	10 月 5 日	木	現代のエジプト	大原與一郎
	10 月 12 日	木	ペルー国事情	淀川正樹
	10 月 19 日	木	アルゼンチンの国情	宮澤次郎
	10 月 26 日	木	インドの近情	高岡大輔
	11 月 2 日	木	最近の智利	森安三郎
	11 月 9 日	木	最近のブラジル	成瀬廉
	11 月 16 日	木	ビルマの事情について	加納四郎
	11 月 30 日	木	カナダの話	永岩彌生
	12 月 14 日	木	佛領印度支那の話	河面繁松
	12 月 21 日	木	英領印度の話	佐藤梅太郎
6	9 月 27 日	水	現代日本画の傾向	川崎小虎
	9 月 29 日	金	現代の大和絵	山口蓬春
	10 月 4 日	水	現代風俗画について	伊東深水
	10 月 6 日	金	風景画に就いて	矢澤眩月
	10 月 11 日	水	誇るべき日本の花鳥画について	西澤笛畝
	10 月 13 日	金	現代日本画の鑑賞について	野田九浦
7	10 月 18 日	水	こまかい話	泉鏡花
8	11 月 15 日	水	もっとも感銘深き文学書のうちより	菊池寛
	11 月 22 日	水	私の感銘を受けた書	中村武羅夫
	11 月 29 日	水	葛西善蔵君の作品	谷崎精二
	12 月 6 日	水	花袋なき花袋の書齋訪問	宇野浩二
	12 月 7 日	木	南阿の話	関千秋
	12 月 13 日	水	人間修養としてのブルター久英雄伝	徳田秋声
	12 月 20 日	水	大近松の情熱文学	近松秋江
9	12 月 22 日	金	時の経済の実話	下村宏

(出典：『東京朝日新聞』「ラジオ欄」及び「NHK 番組確定表」より作成)

## 2. 「家庭大学講座」で提供された内容の領域

それでは、「家庭大学講座」で提供された内容はどのような分野にわたっていたのだろうか。放送開始から 1933 年までに放送された内容を、学問体系としてとらえる為に現在用いられている文部科学省の科学研究費補助金の研究領域における細目表をもとに、その放送題目を分類してみることにする。この間放送された連続講座は 62 項目にのぼる。これに、1933 年に放送された非連続の講座も加えた 75 項目を分類することにする。このうち、47 項目が「人文社会」系に、6 項目が「生物学」系に、2 項目が「理工」系に、8 項目が「総合・新領域」系にあたる。残りの 12 項目は、今の段階でどのような内容であったかが不明であり分類が出来なかったものである。しかしながら、「家庭大学講座」においては、いわゆる文系分野と理系分野に加えて、両方をあわせもつ総合的な内容まで、現在の学問体系に置き換えて考えてみても、広い分野からその題材を選び、放送が行われていたことがわかる。また、今回分類が可能であった 63 項目の中では、約 75%にあたる講座が「人文社会」系であったこともわかる。ちなみに、「生物学」系が約 9%、「理工」系が約 3%、「総合・新領域」系が約 13%であった。

そこで、講座の内容をさらに細目に従って分類してみることにする。まずもっとも少なかった「理工」系の講座に該当した 2 講座は山本忠興による「電気工学」と藤原咲平の「家庭気象学」である。細目でいうと、「電気工学」は「電気・電子工学」のうちの「電力工学・電気機器工学」にあたり、「家庭気象学」は「地球惑星科学」の「気象・海洋物理・陸水学」にあたる。

次に、「生物学」系の 6 項目の講座であるが、このうち「基礎生物学」に分類されるのが、「遺伝・ゲノム動態」の細目にあたる永井潜の「遺伝優生学」と「生物多様性・分類」の細目にあたる石川千代松の「進化論」である。また加藤元一などによって講義された「生理学」は「基礎医学」の中の細目「生理学一般」に分類される。佐伯矩による「栄養学」は「社会医学」の中の細目「公衆衛生学・健康科学」にあたり、残りの 2 項目は「植物と人生」及び「心得置くべき医学の知識」であるが、これについては該当する細目を決定できなかった。

8 項目の講座が該当した「総合・新領域系」の放送では、そのうちの 7 項目が細目「地域研究」にあたる。1933 年に 1 回のみ放送にみられた、国際情勢に関する放送がここに含まれている。項目数は 7 項目であっても、放送回数は少ない。しかし、1933 年になって、この分野の内容が婦人向け番組の中で新たに持ち上げられるようになったことは、その後の戦時下に向かう状況と無関係ではないと思われる。ちなみに残る 1 項目は「科学教養」であり、これは「科学社会学・科学技術史」の細目に該当する。

最後にもっとも多く放送が行われた「人文社会」系についての分類を行いたい。まず、細目表の中の分野と分科について、該当項目を分類してみると、47 項目の放送題目のうち、74%にあたる 35 項目が「人文学」にあたる講座であり、その中では半数以上の 19 項目が「哲学」、12 項目が「文学」、3 項目が「史学」、そして 1 項目が「文化人類学」に相当していることがわかる。「人文社会」系の残りの 12 項目は「社会科学」にあたる講座で、「教育学」、「経済学」、「心理学」にあたる講座がそれぞれ 3 項目あり、その他は「社会学」、「政治学」、「法学」にあたる講座がそれぞれ 1 項目放送されていた。

さらに細目でその内容を確認していく。「人文学」の中でもっとも多かった「哲学」に分類された放送は「美学・美術史」、「宗教学」、「倫理学」の 3 つの細目が含まれていることがわかった。もっとも項目数が多いものは「美学・美術史」で 10 項目がこれにあたる。さらに、「宗教学」が 5 項目、「倫理学」が 4 項目になっている。次に「文学」にあたる項目では「ヨーロッパ語系文学」と「日本文学」にあたる放送項目がそれぞれ 5 項目見られる。加えて「各国文学・文学論」に該当するのが、松浦一が担当した「文学概論」であり、残りの 1 項目は 1933 年に行われた複数講師による文学論に関する連続講座と思われる講座である。「史学」の項目は 3 項目すべてが「日本史」の細目に該当し、「文化人類学」に分類した宇野円空の「東洋民族の文化」は細目では「文化人類学・民俗学」に該当すると考えられる。

以上から、細目を見ると「家庭大学講座」では特に、「美学・美術史」と「文学」に関するものが多くみられることがわかる。ちなみに、放送回数でも、最も多いのが「文学」に関する放送で、104 回の放送で全「家庭大学講座」のうち 14%を占めている。また「美学・美術史」に含まれる講座は 79 回で 11%を占める放送となっており、この 2 細目の放送は回数から見ても、代表的な「家庭大学講座」の放送題目であったといえる。「美学・美術史」で、もっとも多いのは美術鑑賞に関する講座であり、これには洋画、日本画、工業美、彫塑が取り上げられている。また音楽に関する講義が 3 項目含まれている。

「文学」の講座は、前述したように「日本文学」と「ヨーロッパ語系文学」という 2 つの細目にあたる項目が多く放送されていた。「日本文学」では「万葉集」や「山家集」を取り上げた和歌についての講座と、「俳句というものの概念」、「明治の文学」というように、文学、和歌、俳句と日本の文学にかかわる散文・韻文が両方取り上げられている。また「国文学を通じて見たる日本の女性」と題した、文学を女性という切り口から講義する婦人向け番組ならではの講座も見られた。「ヨーロッパ語系文学」では「英文学」、「フランス文学」、「アイルランド文学」、「ドイツ文学」のヨーロッパの文学に加えて「アメリカ文学」がとりあげられていた。

以上のように、「家庭大学講座」では放送された内容は非常に広範囲にわたっていることがわかる。特に多くの放送がなされた「美学・美術史」及び「文学」においても、その中で様々な内容がバランスよく配置されているといえる。

### 3. 「家庭大学講座」の放送内容に見られるカリキュラム

「家庭大学講座」の連続講座として放送された各題目の中では、どのようなカリキュラムが組まれて放送が行われていたのであろうか。テキストや番組表などで当日の放送内容がわかる講座から具体的な番組編成を検討していきたい。

まず、初回に導入としての回をほとんどの講義が設けていることがわかる。この回では、連続して行われる各講座の目的や概略、聴取する際の留意点などが放送されていたようである。その上で、2 回目以降から本格的な講義に入ることが多かった。2 回目以降のカリキュラムには、その分野ごとに特徴がみられるが、時系列的な編成となっているのは「ヨーロッパ語系文学」や「史学」の講座に見られる特徴である。例えば「アメリカ文学」（1930 年放送、講師は日高只一）では、初回で「アメリカ文学の二大潮流」と題して全体の流れを説明した後、植民時代からロマンチズムの時代、そして南北戦争時を経て現代（放送当時）にいたるまでを 11 回にわたって講義している。それぞれの時代の特徴や代表的な作家をとりあげて講義をしていたようで、文学史としての講義になっていたといえる。

また様々な分野の講義に共通して見られた特徴としては、必要な項目を順序だてて編成し、全体を聴取することでそのテーマを習得できるような構成である。このような構成は特に「家庭大学講座」の放送では多くみられた特徴であり、例えば「基礎医学」の分野である「生理学」（1929 年放送、講師は加藤元一など）では、「生理学とは何ぞ？」と題して、1 回目の放送で人体構造の概念を講義した後、「筋肉系統」、「神経系統」、「感覚系統」、「内分泌系統」、「循環系統」、「呼吸系統」、「消化系統」、「泌尿系統」、「体温及びその調節」の順で全 18 回をもって放送した。すべての講義を聴取することで、人間の生理に関するすべての学習ができるようなカリキュラムである。

同様のカリキュラムが見られる例を別に挙げると、「日本文学」の細目にあたる「萬葉集講和」があげられる。この講座では、初回に続いて前半では『万葉集』の代表的な歌人である、柿本人麻呂や山上憶良、山部赤人、または女流歌人などをとりあげながら『万葉集』そのものの解説をおこなっている。しかし後半には「萬葉人の衣食住」（第 8 回）や「萬葉人と旅行」（第 11 回）などにみられるように、『万葉集』のより深い理解ができるように、その時代とその時代に生きた人々の生活や精神世界に触れる講義が行われていた。すべての講義を聴取することで、『万葉集』という和歌集についての理解ができるようなカリキュラムが組まれていたといえる。

以上のように「家庭大学講座」では、そのテーマの流れや全体像を解説する回に続き、放送全回数を聴取することでそのテーマについて理解でき、また知識が深まるように編成がなされていたといえる。その分野での知識を広く浅く横に広げるような「家庭講座」のカリキュラムと比較すると、「家庭大学講座」では、ひとつのテーマを基礎からより高度な内容へと知識を深めていけるようなカリキュラムが組まれていたことが大きな特徴と指摘できるだろう。カリキュラム構成からみても、婦人向け講座はその 3 つの番組がそれぞれの目的にしたがって、特徴的な番組編成を行っていたことがわかるのである。

### 4. 「家庭大学講座」を担当した講師

最後に、「家庭大学講座」で実際に放送を担当した講師について検討をしておきたい。1927 年から 1933 年までの 53 の連続講座を担当したのは 52 人の講師になっている。これらの講師について、様々な分野の人たちを網羅的に掲載している人名事典である『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）』を引いてみた<sup>3)</sup>。講師名と一致する名前を探し、その生年月日から導き出される放送当時の年齢や専門と放送題目との整合性、そして講師の肩書きと事典の記述との一致などをもとに、明らかに放送した講師と同一人物であることを確認した。その結果、45 人が掲載されていた。掲載されていなかった 7 人は、西澤勇志智、久保盛徳、野口篤美、田邊孝次、川村清一、平松鶴吉、水野常吉である。すなわち、当時「家庭大学講座」で放送を行っていた講師陣の多くは、現在でもその功績が高く評価されている人物であるといえ、放送が当時においてもその分野を代表する人物によって行われていたことが指摘できるのである。人物事典に掲載されていなかった 7 人についても、放送予定表の講師肩書きによると、西澤勇志智は理学博

士であり、水野常吉は文部省社会教育官となっている。

さらに、「家庭大学講座」の講師陣をリストで並べてみると、その肩書きからは大学教授の肩書きを持つ講師が多いことが指摘できる。さらに、博士号を取得している講師も多い。具体的にみていくと、大学教授の肩書きをもつ講師は 52 人中 24 人であり、内訳は学習院大学が 1 名、慶応義塾大学が 1 名、駒沢大学が 1 名、曹洞宗大学学長が 1 名、大正大学学長が 1 名、帝大農科大学教授が 1 名、東京家政大学教授が 1 名、東京大学教授が 6 名、武蔵野音楽大学教授が 1 名、明治大学教授が 1 名、龍谷大学教授が 1 名、そして早稲田大学教授が 7 名であった、東洋大学教授が 1 名であった。さらに東京女子高等師範学校の教授が 1 名、講師が 1 名、東京高等師範学校の講師が 1 名、東京専門学校教授が 1 名、東京美術学校の教授、日本女子高等学院の教授、横浜フェリス女学院院長が 1 名ずつであり、この 7 名を加えると、実に当時高等教育機関で教鞭をとっていた人々が 52 人中 31 人にのぼることがわかる。割合でいうと、約 6 割の講師があてはまっている。

「家庭大学講座」は前章で述べたように、「高等教育レベル」の内容を放送することをその趣旨としているが、この意図は、高等教育レベルにふさわしい講師をそろえていることで確認することができるといえよう。

講師と講座の整合性を見ることでも、「家庭大学講座」の高いレベルが推察できる。初回の放送でもあった「遺伝と優生学」を担当した永井潜は優生学の泰斗と表されているだけでなく、教育学では春山作樹、法律学は片山哲など、今日においてもそれぞれの専門で著名な人物として名を残している人物が担当している。明治文学の生き字引と称された本間久雄や、佐々木信綱など大きな影響力を持った人物も担当している。珍しい講座では、「家庭気象学」があるが、担当した藤原咲平は東京帝国大学教授との肩書きでもあるが、中央気象台台長も勤めて、当時は「お天気おじさん」と呼ばれた人物であった。

大学教授の肩書きがなくても、各専門で著名な人物が登場していることがわかる。「常識の映画」では東宝の創設者である森岩雄が担当している。実際に映画制作に携わった映画のプロによる講義であったことがわかる。また、武島又次郎も、号を武島羽衣として現代まで名を残す国文学者であり、詩人である。

## おわりに

以上のように、ラジオ放送で提供された「家庭大学講座」は、1 つのテーマに対して 12 回を基本として、体系だったカリキュラムを提供するものであった。また、その内容は、現在高等教育における研究領域にあてはまるものを、大学で教鞭をとるものが中心となって提供していた。すなわち、「家庭大学講座」はその内容、講座編成、そして講師の質としても、高等教育の社会への開放事業として位置づけられるものであったといえる。

さらに、この番組は、女性を対象として想定しているが、高等教育へ進学する機会がほとんどなかった戦前の女性にとっては、大学での学びをメディアを通して実現する、貴重な機会となっていたといえ、このような試みが、現在の大学開放講座やカルチャーセンターの源流に位置付けられているものと思われる。

## 注

- 1) 日本放送協会編『東京放送局沿革史』1928 年、123-125 頁。
- 2) 『ラジオ年鑑』(昭和 6 年版)、326 頁。
- 3) 日外アソシエーツ編集部編『新訂増補人物レファレンス事典 明治・大正・昭和(戦前) あ〜し』、同『す〜わ』日外アソシエーツ、2000 年。

---

野村 和 (のむら・なごみ)

1973 年、埼玉県生まれ。上智大学教育学科卒業、同大学院文学研究科教育学専攻博士課程後期満期退学。修士(教育学)。現在、武蔵野短期大学幼児教育学科准教授。共著『大学開放の意義と課題に関する研究』上智大学、2000 年；「昭和初期のラジオが提供した『婦人』向け学習プログラム——1925-33 年の番組分析から」『日本社会教育学会紀要』第 40 号、2004 年；共訳『キー・コンピテンシー——国際標準の学力をめざして』明石書店、2006 年；共著『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房、2008 年等。全日本大学開放推進機構会員。